

書評：加藤靖恵『プルーストにおける花の世界の変遷』

小黑, 昌文
駒澤大学総合教育研究部：准教授

<https://doi.org/10.15017/2556303>

出版情報：Stella. 38, pp.101-104, 2019-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：



《書評》

加藤靖恵『プルーストにおける花の世界の変遷』

小 黒 昌 文

芸術家＝作家が死を賭して後世に託すその作品を、プルーストは「永遠の生命をやどす草」になぞらえた。「未完の大聖堂」は、時をこえて豊かに繁茂する植物でもあり、作家はそこに「花」を咲き誇らせることを忘れはしなかった。

このたび加藤靖恵氏がパリのオノレ・シャンピオン出版から上梓した本書（原題 *L'Évolution de l'univers floral chez Proust*）は、プルースト研究の専門誌や大学紀要を中心に発表してきた数多の論考のなかから、広義での「花」にまつわる 15 篇を摘み取って 4 部構成にまとめ上げた一冊である。

第 1 部の鍵となるのは、プルーストが 1904 年に上梓したジョン・ラスキン著『アミアンの聖書』仏訳版であり、同書に付された長大な序文の生成過程である。ラスキンに傾倒した若き日のプルーストが、その美学と思想を如何にして吸収し、自家薬籠中のものとしたうえで、独自の道を切り開くに至ったのか。著者は、件の序文の草稿を出発点としながら、作家が時を同じくして関心を寄せていたシャルダンやレンブラント、モネ、モローといった芸術家をめぐる思索へと補助線を引くことによって、ラスキンに見た「偶像崇拜」という命題の批判的な乗り越えを図っていた作家の軌跡を^{あふ}炙り出す。そこには例えば、「記憶のポエジー」をめぐる理論の芽生えがあるだろうし、作家＝芸術家の思考と図像、そして作品との関わりに一石を投じるメタファーとしての「美術館」の問題や、イメージとテキストの合一の象徴として暗闇に浮かびあがる「サン・マルコ寺院のモザイク画」が明かす絵画と書物の近接関係や解読の可能性もまた、ラスキンという枠組みを超えたプルースト自身の問題として取り上げられることになるだろう（第 1 章）。

そのいっぽうで著者は、プルースト美学の生成について考える新たな材料として、作家が耽読した『近代画家論』にも着目する。ここで興味深いのは、ラスキンが「美学」と「理論」という言葉に託した意味をめぐって、ジョン・ロッ

クやエドモンド・バーク、アーチボルド・アリソンといったイギリス思想の伝統との距離を問題にし、さらにはヘーゲルやカントといったドイツ哲学の受容へと考察の視野を広げている点だろう。くわえて著者は、19世紀フランスの哲学状況へと目を転じ、ラスキンと同時代を生きたシャルル・レヴェックやアンテルム＝エドゥアル・シェニエといった哲学者を参照点としながら、「美」をめぐるラスキン思想の特徴を検証する（第2章）。実証的な調査が望まれる箇所が残りはあるものの、そこには確かにプルーストとラスキンとの交錯点にたいする重層的なアプローチの可能性が開かれている。

ところで第1部に目を通した読者は、そこにまったくといっていいほど「花」が姿を現さないことに戸惑いを覚えるかも知れない。だが、『アミアンの聖書』翻訳序文の執筆過程を丁寧に整理し、ラスキンをとりまく思想的な背景に目を向けたこのパートは、いわば、あとに続く議論のための「土壌作り」であり、「種まき」であると考えるべきだろう。

じじつ、第2部へと論を運んだ著者は、『アミアンの聖書』翻訳序文を『失われた時を求めて』の「母胎」^{マトリックス}と位置づけたうえで、恐らくは最もプルースト的な花のひとつといってよい「サンザシ」に光を当てる。ラスキンの導きによってアミアン大聖堂の黄金の聖母像を丹念に描き出すプルーストは、微笑をたたえた聖なる彫像と「モナリザ」との比較を試みるのだが、著者に拠れば、小説の草稿群には、その微笑みを少女ジルベルトに結びつけるとともに、サンザシの生け垣ごしに登場したその彼女をアミアン大聖堂へとつなぐ痕跡が残されているという（第1章）。いっぽう、黄金の聖母像が鎮座する門を飾る植物のモチーフについて、同時代の美術史家たちの見解が分かれるなか、プルーストは躊躇いなくそれを「花咲くサンザシ」と同定しているが、そこにはラスキンの影響ばかりでなく、マリア崇拜と結びついたこの花を一人の少女と重ね合わせる作家の独創の萌芽を読み取るべきなのだろう（第2章）。そして初恋の対象とともに小説に描かれるサンザシは、主人公の眼差しのなかで官能や逸楽を湛えた花になるが、やはり草稿に目を向ければ、花の美の本質へと手を伸ばそうとする「私」を導く役割を担ったのは、まずはメーテルランクやモネといった実在の芸術家であり、やがてそこにエルスチールやベルゴット、そしてヴァントゥイユといった虚構の芸術家たちが取って代わることになる（第3章）。こうして見ると、サンザシという花こそは、『見出された時』に登場するサン＝ルー

嬢がそうであったように、プルーストに固有な主題の数々が交わる「放射状の交差点」として練り上げられてきたことが分かるはずだ。それは作家自身が「偶像崇拜」から脱却してゆくプロセスでもあるが、ジルベルトの髪をレオナルド・ダ・ヴィンチの手になるスマレの素描に比する主人公の姿には、ロベール・ド・モンテスキウやラスキンの影響から抜け出す以前のものの見方が投影されているといえるだろう（第4章）。

改めてくり返すまでもないが、ラスキンよりも遠くへ行こうとしたプルーストの美学的なビジョンについて考えるうえで、エルスチールという登場人物の生成は格好の材料を提供してくれる。「花」という主題もまた例外ではなく、第3部で著者が取り組むのは、ファンタン＝ラトゥールを越える「花の画の第一人者」と位置づけられた虚構の画家と、プルーストと同じ時代を生きた3人の画家——マネ、ホイッスラー、モネ——との関係である。たとえば、花を描くことを得意とし、優れた静物画をいくつも残したこのマネは、日常の美を浮かびあがらせたかつてのシャルダンと現代のエルスチールをつなぐ存在として解釈できるのではない（第1章）。そして、エルスチールが「ミス・サクリパン」と題した肖像画をめぐる草稿を繙けば、花の瑞々しさと女性の身体がいっそう不可分なかたちで描かれていることが分かるだけでなく、理想の視覚効果をめざしたプルーストの模索の跡は、着想源となったホイッスラーが「灰色と緑色のハーモニー、シスリー・アレクサンダー嬢の肖像」のために数多くのデッサンを残した事実と共振するだろう（第2章）。また、作家の愛したモネの芸術が小説の風景に落とし込まれているのは疑いようのない事実であるが、コンブレーの睡蓮を描いた印象派的な場面から執筆の過程でエルスチールの影が消えるいっぽう、時と場所をかえて、画家にゆかりのバルベックの海で同じ花が（カモメに姿を重ねて）咲き誇り、それを眺めやる主人公によるエルスチールの乗り越えが準備されるという流れは刺激的でもある（第3章）。そして何より、エルスチール自身が描いたとされる花の画は、執筆過程でバラやアオイ、あるいはランへと姿を変えながら、呪われた種族の欲望や貴族のエレガンス、恋する者の嫉妬を絡め取り、来たるべきアルベルチーナの物語の礎となるのである（第4章）。

本書を締めくくる第4部で取り上げられるのは外でもない、海を背景としながら小説世界に登場する「花咲く乙女たち」である。草稿研究者としての著者

はここで、草稿帳＝カイエを「額に納められた一幅の絵画」と捉えなおし、そこにちりばめられた「異なる時期の様々な構成要素」のなかに「論理的ないしはテーマ的な調和」を見出そうとする。カイエ 64 に焦点を当てた考察では、ブルーストがその詩的感受性に強く惹きつけられたルコント・ド・リールを中心に据えながら、共感覚や無意志的記憶、かつての愛がかき立てる郷愁をめぐって、海辺の少女たちとジルベルト、そしてゲルマント公爵夫人を結ぶ糸をたぐり寄せる（第1章）。著者は現在、カイエ 34 と 33 の校訂に取り組み、フランス国立図書館とベルギーのブレポルス書店からの出版を準備している。絶えず流動的に変容を続ける少女たちと多様な花々——マグノリア、ツバキ、ゼラニウム、ザクロ、シネリリア——を結びつけては解いてゆく執筆過程に対する視座や（第2章）、欲望の対象である「庶民の娘」との出会いの演出と舞台設定に垣間見られる社会学的な要素への関心は（第3章）、今なお続く地道で丹念な調査の成果と言えるだろう。そのいっぽうで、眠るアルベルチヌが摘み取られた「花」となって横たわり、死の予兆となる場面をめぐる分析は、初出の時期（1989年）からしても、加藤氏の研究者としての原点を感じさせる（第4章）。そして、^{いまわ}今際の際にある祖母と、睡眠の底に沈んだアルベルチヌとのあいだに近接性を認めた当時の指摘は、新たにエミール・マールの『フランス13世紀宗教芸術』を橋渡しとして、聖母マリアの死と昇天、復活をめぐる物語へと通じてゆくのである（第5章）。

ここに概観した本書は、加藤氏にとっては30年来の関心がかたちとなった一冊である。由緒ある出版社の、虚飾とは無縁な装幀は、質実な研究書にふさわしい。その思索の広がりにつつまれたからだろうか、ざらりとした質感を手に残し、光の当たり方によって微かに表情を変える淡紅色の表紙から、「薔薇色の^{ローズ}花崗岩」という言葉を思い浮かべた。ブルターニュ北部の海岸線を幻想的に彩るこの岩石は、「私」が見初めたアルベルチヌの頬に重なって光沢を放ち、エルスチールの筆によって灼熱の海洋画に描きこまれている。別名、御影石。奇しくも本書は「花」の「影」に包まれて世に出たことになる。そして、読者がその硬質な佇まいのうちに特別な温もりを感じ取ることがあるとするならば、それは本書が、著者の研究の日々を共にした愛猫に献じられた篤実の「花束」でもあるからだ。